

生活環境と食事づくりの状況調査

A Study on the Relation between Living Environment and Meal-Making

大菅 洋子 石塚 盈代
OSUGA Yoko and ISHIZUKA Mitsuyo

I 目的

男女共同参画時代となり、女性が社会に提言・進出する機会が盛んとなって歓迎されている。と同時に、炊事や育児等の家事作業も男女が共に協力し合って営んでいくことが推進されている。筆者らはその中で生活の基盤となる食事作りの現状や課題を認識して、食事環境の改善方策を見いだしたいと考えている。そこで、現在と将来の家族構成や食事作りへの関わりについて調査を行ったので報告する。

II 調査方法

- 1) 調査の対象：本学園付属高校生1年59名（男子40名，女子19名）と本学食物栄養学科2年87名（全員女子）である。対象者の属性を表1に示した。
- 2) 調査の時期：平成12年7月
- 3) 調査の方法：生活環境と食事作りについての調査用紙を作成して（巻末に添付）、対象

表1 対象者の属性

家族構成		父	母	祖父	祖母	一人っ子	拡大家族	核家族
高校生	男 n = 40	36	39	18	19	12	22	18
	女 n = 19	18	19	8	9	3	9	10
短大生	女 n = 87	72	75	15	39	13	41	46

者に授業時間の中で配布し、記入してもらった。その際、調査の主旨を高校生には家庭科教員が、短大生には筆者らが説明して回答を得て集計した。

III 結果と考察

1. 将来の家族構成

将来の家族構成の希望は表2、図1に示した。結婚後は子供と暮らし、子供が独立（自立）すると夫婦2人暮らし、70歳頃の高齢期も夫婦2人暮らしの生活を希望する者の比率が高く、高校生では各々42名（71.2%）、40名（67.8%）、

おおすが ようこ（食物栄養学科） いしづか みつよ（食物栄養学科）

表2 将来の家族構成の希望

年 代	結婚後		息子や娘が自立した頃		70歳の頃	
	高校生	短大生	高校生	短大生	高校生	短大生
夫婦2人暮らし	7 (11.9)	7 (8.0)	40 (67.8)	54 (62.1)	36 (61.0)	50 (57.5)
夫婦・息子や娘と同居	42 (71.2)	52 (59.8)	7 (11.9)	15 (17.2)	11 (18.6)	28 (32.2)
親・夫婦・息子や娘と同居	4 (6.8)	23 (26.4)	1 (1.7)	3 (3.4)	2 (3.4)	2 (2.3)
親・夫婦の同居	1 (1.7)	1 (1.1)	7 (11.9)	12 (13.8)	1 (1.7)	0 (0)
1人暮らし	3 (5.1)	0 (0)	1 (1.7)	1 (1.1)	4 (6.8)	3 (3.4)
その他	2 (3.4)	4 (4.6)	3 (5.1)	2 (2.3)	5 (8.5)	4 (4.6)

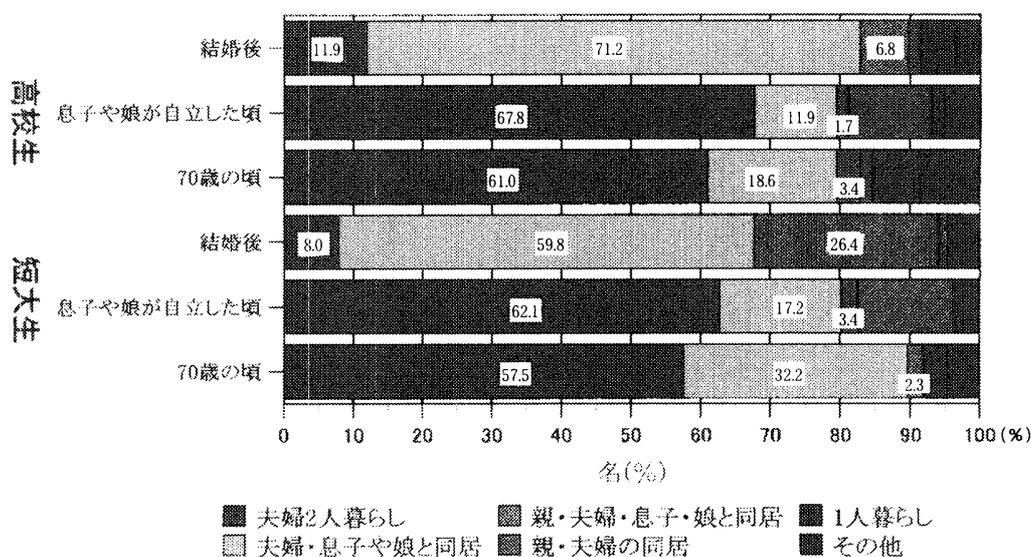


図1 将来の家族構成の希望

36名 (61.0%)、となり、短大生では52名 (57.8%)、54名 (62.1%)、50名 (57.5%) となっていた。結婚後は子供を産み育て、親子水入らずの生活を、子供が成長し、独立した後は夫婦水入らずの生活を望んでいる。その反面、高齢期には子供との同居を希望する者が、高校生11名 (18.6%)、短大生28名 (32.2%) おり、子供が独立時の同居の1.5~1.9倍となっていた。老夫婦2人の暮らしを望むものの、不安のあることも伺える。

また、短大生に結婚後は親・夫婦・子供の三世同居を希望する者が23名 (26.4%) いて意

外に多いと思った。これを現在の家族構成別にみても、結婚後は親・夫婦・子供との同居、子供が独立の頃と高齢期は夫婦・子供との同居を希望するが、拡大家族 (三世同居) の者は各々14名 (34.1%)、9名 (22.0%)、19名 (46.3%) となり、核家族 (二世同居) の者は9名 (19.6%)、6名 (13.6%)、9名 (19.6%) となって、現状の親・祖父母との同居生活を反映していると言えた。高校生の場合でも、結婚後は親・夫婦・子供の同居、子供が独立の頃と高齢期は夫婦・子供との同居とする者が拡大家族では3名 (9.3%)、6名 (18.8%)、7名

(21.9%)、核家族では1名(3.4%)、1名(3.4%)、3名(10.7%)となり、短大生に比べて低率ながらも同傾向となっていた。

著者らが行った高齢者の希望する家族構成においても「2～3世代同居したい」が高齢者予備軍(平均年齢62.9歳)が15.0%、高齢者軍(平均年齢71.0歳)が34.5%を示し、「2～3世代同居しているであろう」が高齢者予備軍15.0%、高齢者軍28.9%という結果を得ている。¹⁾

富山県は三世同居率が27.8%で、全国平均の11.5%より高いことも一因と考えられる。

結婚後は夫婦・子供との核家族の生活を希望している者が71.2～59.8%と高いことから若い世代が核家族で生活していける技術的・経済的能力を備えていることが肝要であり、訓練によって備えていかなければならないという認識をもたせることが大切と言える。

短大生は親・夫婦・子供との同居を望み、子供が独立すると、子供と同居(3.5%)するより親と同居(13.8%)となつて、親をみる意識が強いのだろうかとも考えた。

2. 食事の支度状況

1) 料理作りの担当者

現在の食事作りの状況は表3に示した。料理を作る人は母親が主体で、高校生が54名

(91.5%)、短大生が65名(74.7%)となつていた。また、祖母・自分とする者も、高校生が8名(13.6%)・2名(3.4%)、短大生が12名(13.8%)・23名(26.4%)となつていた。短大生の自分とする者には下宿生が11名含まれているので、これを除くと12名(13.7%)の低率になる。食物栄養学科に在籍しながら、実際に料理にたずさわる者が10%程度とは残念に思う。反面、高校生に自分とする者が2名おり、少数だが好ましいと思った。

また、これを家族構成別にみると拡大家族では母親83.6%、祖母26.0%、自分9.6%となり、核家族では母親75.7%、自分28.4%となつて、何れも母親中心であった。しかし、自分とする者が拡大家族より核家族に多く、生活環境に影響されることが伺えた。

2) 食事の準備

食事の準備の内容としては「手作りが多い」が高校生51名(86.4%)、短大生65名(74.7%)となり、好ましい傾向と思えた。「既製品・惣菜が多い」が、高校生5名(8.5%)、短大生9名(10.3%)おり、食卓にのせる際にはそのままの姿(パック等)ではなく、野菜か何か一品を添えたり、切り方や盛り付け皿を工夫したりして、手作りの心を生かしてほしいものと思っ

表3 食事の仕度状況

料理を作る人(複数回答)			食事の準備			手伝いの頻度			手伝いの内容(複数回答)		
内容	対象者		内容	対象者		内容	対象者		内容	対象者	
	高校生	短大生		高校生	短大生		高校生	短大生		高校生	短大生
自分	2(3.4)	23(26.4)	手作りが多い	51(86.4)	77(88.5)	毎日する	6(10.2)	17(19.5)	調理	12(20.3)	57(65.5)
母	54(91.5)	65(74.7)	既製品惣菜が多い	5(8.5)	9(10.3)	ほとんど毎日	5(8.5)	16(18.4)	配膳	17(28.8)	35(40.2)
父	2(3.4)	0(0)	宅配出前が多い	3(5.1)	1(1.1)	時々する	22(37.3)	34(39.1)	後片付け	28(47.5)	39(44.8)
祖母	8(13.6)	12(13.8)	その他	0(0)	0(0)	まれにする	10(16.9)	13(14.9)	その他	1(1.7)	3(3.4)
祖父	0(0)	0(0)				全くしない	16(27.1)	5(5.7)			
兄弟姉妹	0(0)	3(3.4)				無記入	0(0)	2(2.3)			
他の人	2(3.4)	2(2.3)									

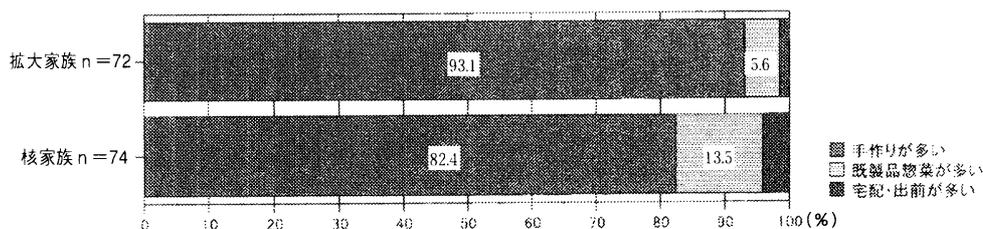


図2 食事の準備 — 拡大家族と核家族の比較 —

た。

これを拡大家族と核家族で比較してみると(図2), 両者とも「手作りが多い」とするものの, 拡大家族の91.3%に対して核家族は82.4%となつてわずかに低く, 反面「既製品・惣菜の利用が多い」は拡大家族の5.6%に対して核家族は13.5%と高くなった。予想通りの傾向と言えた。

3) 手伝いの頻度と内容

食事作りへの参加(手伝い)状況は「毎日する・ほとんど毎日する」があわせて高校生11名(18.6%, 内男子5名の12.5%, 女子6名の31.6%), 短大生33名(37.9%)となり, 両者ともに低い結果となった。特に短大生で「まれにする・全くしない」があわせて18名(20.7%)いる。女子短大生の欠食率が朝食5.0%, 夕食5.5%であることや²⁾, アルバイト, 遠距離通学等で帰宅の遅いこと³⁾も影響していると考えられるが, 将来に不安を感じざるを得ない。また,

高校生の男子に「全くしない」が1/3(13名の32.5%)いた。手伝いについて, 本人に「する気がないのか」あるいは「する気があっても出来ない状況なのか」を今後検討してみたい。

食事作りへの参加内容として, 高校生は後片付けが28名(47.5%)と最も多く, 次いで配膳が17名(28.8%), 調理が12名(20.3%)であり, 短大生は調理が57名(65.5%)と最も多く, 次いで後片付けが39名(44.8%), 配膳が35名(40.2%)であった。しかし, 短大生のうち下宿生を除くと, 調理60.5%, 後片付け36.8%, 配膳31.6%と低くなった。また, 調理, 配膳, 後片付けのどれにも参加している者は高校生4名(6.8%, 男子2名, 女子2名), 短大生6名(6.9%, 下宿生を除く)いた。高校生では, 将来進学等で一人暮らしを迎える者もいると思われるので, 多くの者が, 手伝いに参加することを期待する。短大生も将来栄養士職をめざすものとしての自覚を持ち, 実践力を身に付けてお

表4 将来の食事づくりの必要性

対象 内容	高校生		短大生 n=87	理由(複数回答)							
	男n=40	女n=19		項目		高校生	短大生	項目		高校生	短大生
必要である	52 (88.1)		85 (97.7)	夫婦共働きだから		6 (11.5)	22 (25.9)	誰でも作ることが大切だから		22 (42.3)	42 (49.4)
	33 (82.5) 19 (100.0)			料理作りは好きだから		21 (40.4)	30 (35.3)	子育てで夫(妻)が忙しいから		4 (7.7)	4 (4.7)
				好きな食物を食べたいから		11 (21.2)	18 (21.2)	男女平等の社会だから		7 (13.5)	12 (14.1)
				自分で作る物と思うから		8 (15.4)	35 (41.2)	その他		1 (1.9)	2 (2.4)
あまり必要と思わない	6 (10.2)		1 (1.1)	仕事をしているから		2 (28.6)	1 (50.0)	夫(妻)が作るから		3 (42.9)	0 (0)
	6 (15.0) 0 (0)			料理作りは面倒(嫌い)だから		2 (28.6)	0 (0)	娘(息子)が作るから		0 (0)	0 (0)
必要と思わない	1 (1.7)		1 (1.1)	お店を利用するから		0 (0)	0 (0)	親が作るから		0 (0)	0 (0)
	1 (2.5) 0 (0)			自分で作るものと思ってない		0 (0)	0 (0)	その他		0 (0)	0 (0)

くように強く願望する。

3. 将来の食事作り

将来、自分自身が食事作りの必要性を感じているかの有無と理由を表4に示した。

食事作りは「自分でしなければならない」と必要性を自覚している者は、高校生が52名(88.1%)、短大生が85名(97.7%)と両者ともに高い比率を示し、将来に希望のもてる数値と思えた。

しかし、高校生のうち、女子は全員が必要性を感じていたが、男子の7名(17.5%)は必要性を感じていなかった。短大生でも2名が必要性を感じておらず、この2名は共に食事作りに参加しており、意外である。

また短大生で手伝いに参加していない18名(表3)全員は、将来の食事作りの必要性は感じており安心した。

食事作りの必要性を感じる理由として、高校生は「誰でもつくることが大切」22名(42.3%)、「料理作りが好き」21名(40.4%)、「好きな物を食べたい」11名(21.2%)、となっている。特に男子では「誰でも作る大切」15名(37.5%)、「料理作りが好き」11名(27.5%)、「男女平等の社会」6名(15.0%)となっていて、男女共生社会としての自覚が現れだしているように思った。

短大生は「誰でも作る大切」42名(49.4%)、「料理作りが好き」30名(35.3%)、「自分で作るもの」35名(41.2%)、「共働き」22名(25.9%)となっていて、食事の準備は自分(女性)がするものという意識のあることも伺えた。母親主体の食事作り(表3)の影響とも言える。

自販機やコンビニエンスストア等の普及で食事環境の変化・進展はめざましい。外食、テイクアウト食品、加工食品等と台所の省力化・外

部化が進む中で「食」に対する価値観も多様化して、生活習慣病の多発化・低年齢化、食行動の混乱(コ食化)・不規則性等多くの課題が山積している。

「健康日本21」「新しい食生活指針」等が推進されている中で、健康であることの意義を認識して実践する意欲を高め、確かめる必要性に迫られている。日常生活の基盤は健全なる生活であり、そのための食教育について食行動も含めて検討を加えたい。

IV まとめ

附属高校生1年59名(男子40名、女子19名)と本学食物栄養学科2年87名(全員女子)を対象に、現在と将来の家族構成や食事作りへの関わりについて調査を行ったところ、以下の結果を得た。

1) 対象者の属性は拡大家族と核家族が高校生31名と28名、短大生41名と46名である。

2) 将来の家族構成は、結婚後は子供と暮らし、子供が独立すると夫婦2人、高齢期も夫婦2人の生活を希望する者が、高校生42名(71.2%)、40名(67.8%)、36名(61.0%)で、短大生52名(59.8%)、54名(62.1%)、50名(52.5%)であった。

3) 高齢期は子供と同居を希望する者が高校生11名(18.6%)、短大生28名(32.2%)で、子供の独立時も同居の1.5~1.9倍であった。

4) 短大生に結婚後は親や子供と同居を希望する者が23名(26.4%)いて、拡大家族の者14名、核家族の者9名であった。

5) 現在の食事作りは「母親主体」「手作りが多い」とする者は高校生54名(91.5%)、51名(86.4%)、短大生65名(74.7%)、77名(88.5%)であった。

6) 食事作りへの参加状況は「毎日する・ほと

んど毎日する」が高校生11名（18.6%）、短大生33名（37.9%）であった。

7) 将来の食事作りは「自分でしなければならない」が高校生52名（88.1%）、短大生85名（97.7%）であった。

V 参考文献

- 1) 石塚他「高齢者の調理をめぐる生活環境」
富山短期大学紀要第36巻 2001年 3月
- 2) 大菅 「食事行動の一考察」
富山女子短期大学紀要第31輯 1996年 3月
- 3) 大菅他「女子短大生の食生活調査」
富山女子短期大学紀要第32輯 1997年 3月

<参考資料>

生活環境と食事作りの状況調査

平成12年 7月

生活の基盤となる食事作りについて、その状況や要望を認識して食事環境の改善方策を見だし、皆さんの将来に役立つような助言をめざしています。

以下の質問にお答えください。（該当する項目に○印をつけてください）

男・女 _____ 学 年 _____
居住地 _____ 市町村 _____

① 家庭状況についてお聞きします。

- 1) 現在の家族構成（いっしょに住んでいる方すべてに○をつけてください）
父 母 祖父 祖母 兄 姉 弟 妹 その他の方（ ）
- 2) 将来、こうありたいと思う家族構成を a～c それぞれについて1つ選んでください。

	夫婦2人暮らし	夫婦・息子や娘の同居	親・夫婦・息子や娘の同居	親・夫婦の同居	1人暮らし	その他
a 結婚後						
b 息子や娘が自立した頃						
c 70歳の頃						

② 現在の食事の仕度についてお聞きします。

- 1) 食事の仕度は主に誰がしていらっしゃいますか。
1 自分 2 母 3 父 4 祖母 5 祖父
6 姉(妹) 7 兄(弟) 8 その他()
- 2) 食事の準備はどのようにされていますか。
1 手作り(家で作る)が多い
2 出来合いの惣菜を利用することが多い
3 宅配業者(給食)や出前(仕出し)を利用することが多い
4 その他()
- 3) お手伝いをよくしますか。 4) それは主にどんな内容ですか。
1 毎日する
2 ほとんど毎日する
3 時々する
4 まれにする
5 まったくしない
1 調理
2 配膳
3 後片づけ
4 その他()

③ 将来、食事作りはしなければいけないと思いますか。

該当する理由すべてに○で答えてください。

- 1 思う →→→ { 夫婦共働きだから
好きな食べ物を食べたいから
誰でも作ることが大切だから
男女平等の社会だから } 料理作りは好きだから
自分で作るものと思うから
子育てで夫または妻が忙しいから
その他()
- 2 あまり
 思わない →→→ { 仕事をしているから
 お店を利用するから
 夫または妻が作るから } 料理作りは面倒(嫌い)だから
自分で作るものと思ってないから
娘または息子が作るから
その他()
- 3 思わない

ご協力ありがとうございました。
食事作り環境を考える研究会
(石塚・大菅・北陸電力KK地域総合研究所)